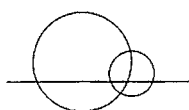


〈講演〉



2. 孫文を支援した山田兄弟

愛知大学現代中国学部教授 馬場 毅

【司会】 ここからは司会変わりました藤田が進行させていただきます。

次は先ほどご紹介がありましたが、現代中国学部の学部長をやっておられます馬場先生のお話です。「孫文を支援した山田兄弟」。ここからいよいよ山田兄弟のお話が始まります。中国近代史をご専門とされていまして、中国の中でも近代史のいろいろな動きを多方面にわたって調査・研究され、その中でも山田兄弟の動きを中国近代史、あるいは日中関係史の中で追いつけておられます。今日は特にご当地に関係があると思いますので、ぜひご清聴いただければありがたいと思います。では早速お願いいたします。

【馬場】 ただいまご紹介にあずかりました愛知大学の馬場でございます。よろしく願いいたします。

はじめに

私の本日のテーマは「孫文を支援した山田兄弟」ということですが、最初にちょっとこのテーマに関連しまして、東亜同文書院の位置付けについて若干私見を述べさせていただきますと思います。

東亜同文書院というのは1901年設立されます。設立趣意書によれば日清戦争後の列強からの分割の危機に際して中国を保全すること、それから日中の共存共栄を掲げています。そのための政治経

済面での実務家養成をします。しかしながらこの段階ですでに、日本は1895年日清戦争のあとに台湾を植民地化しております。そういう形では中国分割に参加して、中国保全に敵対する行動を行っていました。一方で中国保全と日中の共存共栄を図ることを目的としているわけですが、日本国家あるいは日本政府の行動としては中国保全に敵対する行動を行なっている。当時の東亜同文書院の関係者が日本政府のそのような行動に対して批判的な言動を行なった事例はほとんど見られない。最初から自国政府の政策と大学設立の目的との矛盾というのは充分突き詰められていない。その後1905年に日露戦争があって1910年には朝鮮を植民地化していく。そういう意味では帝国主義化していく日本政府の政策は、東亜同文書院の掲げた中国保全と日中の共存共栄ということと矛盾対立が拡大していきます。1931年の満洲事変以後そのことは大変顕著であると考えています。

先ほど藤田先生がおっしゃったように東亜同文書院に中華学生部という、中国人留学生を収容して育成する特別なところがありました。そこにいた中国人の学生も、満洲事変以後は次々とやめていって、結局中華学生部は廃止に追い込まれる。そういう意味で満洲事変以後は1つの画期であると考えております。ただこういうような考え方、つまり中国を保全して日中の共存共栄を掲げて欧米の侵略に対抗しようという、これは一言で言う

とアジア主義ということになると思いますけれども、1901年段階のアジア主義というのは、今申し上げたような矛盾を含んでおり、ある意味では許容力があって、ある意味では漠然としたところがあったと思います。ところが31年以後はその矛盾がどうしてもなくなってきたんだというふうに私は考えております。それはある意味で日本の近代史を総括することと関連していると思います。しかしながら、中には正に命がけて中国革命を支援した者が東亜同文書院関係者の中にも出てまいります。他方で日本の国策に尖兵的な役割をした人達も出てくるわけで、右から左まで多様な人材を輩出しているというのが東亜同文書院の特色というふうに考えております。

その中で今回私のお話します山田良政・純三郎が主として活躍したのは1920年代、すなわち孫文が1925年に死にますけれども、そこまでが私としては彼等の非常に光り輝いている時期だと考えております。20年代まで正に命がけて、兄良政は自ら中国革命に殉じました。弟も大変危険な目に遭いながら孫文の革命運動に協力しております。これが山田良政です。先ほど藤田先生が学生達は弁髪を結っていると言われました。これも同じように帽子を被って弁髪を結っております。こ



山田良政

こで東亜同文書院との関係がすぐ出てくるんですが、ご当地に来て東亜同文書院との関係と言う前に、やはり弘前との関係を簡単に述べさせていただきます。詳しくはこのあといづみ先生のほうからお話があるかと思えます。

山田良政

山田良政は1868年（慶応4年、のちに改元して明治元年となります）1月1日、大変めでたい日に、津軽藩士の山田浩蔵と母親きせの長男として弘前城下の在府町に生まれております。その後朝陽小学校を出て東奥義塾（叔父の菊池九郎が明治5年に設立）を経て青森師範に入っています。その青森師範を退学になるんですが、それは寮の賄い騒動というのがありまして、寮の食事の問題について学生達が不満を述べ、友達の身代わりになってその責を負って退学したというふうにならわれております。そのあとたまたま家の近くに陸羯南という、日本主義者でありかつ言論界で大変有名な方がいて、この陸羯南の紹介によって水産伝習所（現在の東京水産大学）に入学しました。1889年に入学し、1890年1月に卒業しております。水産関係の勉強をしたということで卒業後北海道昆布会社というところに就職し、上海支社に派遣されます。それが90年の1月で、北海道昆布会社に勤めながら、先ほどの藤田先生のお話とここで関連してくるわけですが、荒尾精らの設立した中国語や中国の商事慣行を学ぶ日清貿易研究所にも通いまして、中国語や中国のビジネス関係等について学び始めます。

94年から95年に日清戦争が起きますが、その時に北海道昆布会社を辞め、陸軍の通訳官として中国の東北地方に派遣されています。戦争が終わると台湾に派遣されます。そして98年に先ほどの東亜同文会ができます。これは日清戦争後中国と関係しながら日本の国際的地位を強化しようということで、会長が貴族院議長であった近衛篤磨（霞山公）です。良政は1900年5月に開校した南

京の同文書院の教授兼舎監となっています。その後1900年8月、孫文の率いる革命への参加のため南京同文書院を辞しています。このあと惠州蜂起に参加して戦死するということになるんですけども。

以上は東亜同文会との関係ですが、ちょっと時代を戻しまして、良政が中国革命との関わりを能動的にやり始めたのはいつか。1898年日清戦争の敗北以後、清朝内部の改革派が光緒帝のもとで改革を始めていく。普通「戊戌変法」と言っていますが、政変というのはそれに対する保守派のクーデターになります。西太后を中心として袁世凱が武力を発動して改革派の連中を次々と捕まえていく。日本大使館付き海軍武官であった滝川具和。良政は彼とは日清戦争のあと台湾に行った時代以来の知り合いです。それから平山周。この人も日清戦争のあと孫文との接触があって、『支那革命党及秘密結社』という本を書いています。支那革命党というのは孫文の率いたものです。この本は1911年に出ていますが、彼が接触し始めたのは1890年代ですので、この支那革命党というのは当時の孫文の率いた興中会、それから秘密結社というのは孫文の革命に協力した天地会、別名三合会とか哥老会という組織がありますけれども、これらについて書いていて、この本はのちに中国語に翻訳されます。それで秘密結社という言葉は元々日本語から中国語に入ったんだというふうに言われています。清朝の兵隊が変法派とみなされる人物を次々と捕まえているわけですけども、良政は平山周、滝川具和とともに、王照という人物を、真夜中に北京から天津まで命がけで護送して、当時の日本の軍艦大島に収容しています。日本公使館に保護されていたこれも変法派の大物梁啓超も大島に収容されて日本に亡命していく。それから変法派の指導者として有名な康有為もイギリス大使館に亡命し、それから日本に亡命することになります。この時命がけで王照を逃がしたことが、良政の名が孫文の革命を指導する平山周や

なんかの間で知られるきっかけになったと思います。

99年7月、これが孫文との出会いなんですが、平山周の斡旋によって日本の神田三崎町の家で孫文と会います。ここで従来の変法派と言われる、清朝の存続を前提にして改良しようというグループから孫文の率いる、清朝を打倒して革命をしなければ中国は救われないというグループに転換します。どうして転換したか。良政の書いたものがほとんどないものですから非常に分かりづらいんですけども。宮崎滔天という大変有名な孫文の支援者がいて、彼はこの前に孫文に会っているんですけども、滔天の書いた『三十三年の夢』という自伝があります。そこでどういうふうに言っているか。「朝孫文のいる日本の家に行った」。孫文というのはだいたい身なりを構わない人で、顔も洗わないで寝間着姿で出てくる。それから「わざわざ訪ねてくれたか」というので、今度は身繕いを整えて出てくる。どんな格好をしているかと言うと、あとで写真が出てきますけれども洋装をして頭をポマードかなんかでちゃんと固めている。宮崎滔天は大変がっかりする。清朝に対して革命を起こそうという人物は東洋の大豪傑風の人物でなくちゃいけない。ところが何だか西洋の紳士みたいなのが出てきたのががっかりした。それで終わったら宮崎滔天が一生孫文を支援することはなかったわけです。ところが孫文が一言口を開くと、とりわけ革命構想を語ると、その熱弁に魅入られたという。「初めは処女の如し」と言っていますね。それからそのあとは「虎や狼がうそぶくが如し」。その熱弁に魅入られる。おそらく良政が革命側支援に回ったのも同じような状況があったのではないかというふうに私は考えております。

惠州蜂起

これが1900年6月で、革命蜂起という構想を打ち明けられ、参加を表明します。この時正式に



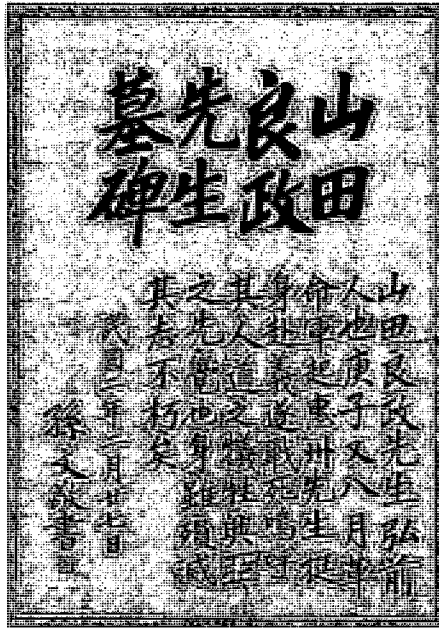
弟の純三郎を孫文に紹介しています。東亜同文書院を設立した母体である東亜同文会は、山田良政や南京同文書院の学生の革命運動への参加を禁止しますが、山田良政は従いませんでした。そしていよいよ惠州蜂起になるんですが、この1900年という年は北方で清朝が義和団と共に八ヶ国連合に宣戦布告をしていて、華北は戦争状態になっています。ところが当時の清朝で、たとえば南には李鴻章がいるわけですが、李鴻章は東南互保と言ってそれに従わなかった。つまり清朝は全国挙げて八ヶ国連合と戦わなければいけないんですが、当時兩広総督であった李鴻章はそれに従わない。南方の有力な総督達、総督巡撫達もそれに従わないということがあります。ともあれ北方では戦争が起きている。そういう状況の中で山田良政が仲介し、それからもともと知り合いの後藤新平（当時台湾総督府の民政長官）を仲介にして、台湾総督児玉源太郎に話をつけ、孫文に対して惠州起義軍（惠州蜂起軍）が、惠州は広州のすぐ近くですけれども、それを海岸沿いに北上して海豊や陸豊というところまで来たならば、児玉総督が台湾から2個師団分の武器供与と日本軍人の起義軍への参加を約束する。言わばその援助を期待して起義軍は蜂起し、沿海地帯を北上していく。

そういう計画ができた上で、孫文の指示を受け鄭士良という人物が秘密結社である三合会、彼等は清に反して明を復興するという「反清復明」をスローガンにしていますので、孫文は今時（つまり19世紀から20世紀の初めにかけて）皇帝制の明朝を復興するというのは時代錯誤だから、反清・共和制の中華民国を作ろうということで彼等に働きかけて彼等と一緒にやる。1900年10月6日、三合会を率いて惠州で蜂起します。約束通り日本側の武器供与と日本軍人の参加、さらには指導者の孫文が台湾にいましたので海を渡って彼等のもとに参加することを期待して、最終的には福建省の廈門を目指すのが当初の計画でした。

ところがこの時に日本の山縣内閣が総辞職しま

して、後継首相の伊藤博文は、反清の武装勢力が福建まで出てきてそこに日本軍が参加してくるということになると、当時の列強の軍事あるいは政治バランスの中で日本の勢力が拡大し列強から干渉が起きるのではないかということで、この計画を結局途中で中止させてしまう。孫文への武器供与と日本軍人の起義軍への参加を禁止します。起義軍は蜂起して清軍と戦いながら北上しているわけですけれども、山田良政は孫文の命を受けて児玉総督の方針変更と、そのあとの処置は臨機応変にやりなさいということ伝えるために派遣され、リーダーであった鄭士良のもとに到着する。これが1900年10月20日です。鄭士良はもう日本軍の援軍がないということを知ったあと、軍を解散したのち惠州の東方の三多祝というところまで戻ってくるんですけれども、清軍に攻撃され山田良政ら6人が捕虜になり、結局良政は清軍に殺されて密かに葬られます。山田良政の最期はしばらく分かりません。ただ日本人で中国革命に殉じて死んだ最初の1人です。山田良政に限らず辛亥革命の時にも日本人で清軍と戦って戦死した人が何人もいますけれども、最初の1人。

その最期はよく分からないということになるんですが、それでいろいろな伝説が生まれます。たとえば山田良政は東亜同文書院に通っていて中国語がかなりできた。だけど一言もしゃべらない。どうしてしゃべらないか。彼がしゃべる中国語は所詮日本人がしゃべる中国語で、外国人と分かる。「日本人だ」と言ったら釈放されたかも知れないけれども何もしゃべらないでそのまま死んだ、殺されたというふうに言われています。確かなところはよく分からないけれども、ともあれ行方不明となった。後に辛亥革命が1911年に起き、孫文が翌12年に臨時大総統になって、そのあと辞職後日本に来た時にこの墓碑を書いたのだと思います。同じような文章が貞昌寺にもあります。ただし貞昌寺のほうは民国8年、1919年ですから、この段階ではすでに山田良政が戦死しているとい



山田良政墓碑

うことがはっきりしています。ちょっと読みますと、「山田良政先生、弘前の人なり。庚子（1900年）また八月」、この年は8月が旧暦で2度あるんです。だから「また8月」と言う。西暦に直すとほぼ10月になります。「革命軍惠州に起こりて先生身を挺して義に赴き遂に戦死す。ああ、それは人道の犠牲、興亜の先覚なり。身隠滅すと雖もその志朽ちず。民国二年（1913年）孫文敬書」と書いてあります。この文書が貞昌寺にもほぼ同じような内容であるようです。と言うのは実は私、昨日来たばかりで、ぜひ貞昌寺に行ってこの墓碑を見たいんですがまだ行っておりません。私の同僚が見たところによるとほぼ同じだということです。

山田純三郎

続きまして山田純三郎です。純三郎も山田浩蔵の三男として在府町で生まれ、1896年に兄と同じように東興義塾を卒業しております。札幌農学校進学を志したんですが失敗して北海道に渡り、進学後の学費稼ぎも兼ねて室蘭炭鉱汽船の荷役夫や掃除夫をやって大変苦勞しております。その後上京します。1899年に東亜同文会の清国留学生入試に合格して上海に渡ります。そして1900年

5月、南京同文書院に入学した第1期生です。兄は10月に亡くなっているわけですが、1901年兄良政の影響もあって中国革命に興味を持ち、そのため学業に身が入らず結局退学になります。当時の同文書院はおおらかだったと思うんですけども、院長根津一のはからいで退学した学生が事務員兼助教授となるという、今ではちょっと考えられないことですが、教える立場になります。その後1904年5月には日露戦争従軍のため東亜同文書院を辞職して、兄と同じように通訳官となっています。福島少将の通訳官です。

戦争が終わったあとふたたび東亜同文書院に戻ってきて、1907年1月に東亜同文書院の教授となります。その後東亜同文書院を辞めて満鉄に入社するんですが、当時の総裁が兄良政と大変関係の深かった後藤新平で、その引きもあって満鉄に入社し、ずっと満鉄の社員の身でありながら孫文の革命運動を支援するという形をとっていきます。孫文と最初に非公式に会ったのが、兄良政が東京神田三崎町の家で孫文と会った時、障子に穴を開けて盗み見たと言われていました。その時の印象が、孫文というのは大変頭のでかい男だということ。小さな穴からこうやって見たんだと思いますけれども、直接に話し合った経験はありません。その後1900年6月、上海の旭館という旅館で、兄良政により孫文に紹介されています。

1911年10月10日に辛亥革命が起きた時には孫文はアメリカにいて、革命勃発時にはいなかったんですね。それから戻ってきます。これはデンバー号の船上で会った時の写真らしいです。こうやって見ると確かに孫文は頭がでかいと言えばでかい。純三郎は面長な顔立ちをしていますのでね。孫文は宮崎滔天ががっかりしたような洋装をしています。もともと彼はハワイのキリスト教経営の高等学校で勉強していますし、香港で医学校なんかも行っていますので、そういう意味では欧米的な服装が似合うかも知れません。純三郎も私が見るとなかなか洋装が似合うなという感じがして



山田純三郎と孫文

います。これが1911年12月の段階の写真です。その直前に彼が直接革命運動に参加して、革命派の陳其美、これは蒋介石の親分筋に当たる人であって、後に純三郎の満鉄の社宅で袁世凱の派遣した刺客によって暗殺される人物ですけれども、彼が上海にあった清朝の江南機器局（武器を作っているところ）を襲撃した時、日本の有吉明総領事から拳銃3丁を借りて陳其美に渡している。まあ昔の外交官は豪胆と言えれば豪胆ですね。どっちに転ぶか分からないのに革命派の連中に拳銃を渡しちゃったという。

日本からの借款交渉を仲介

その後11年12月に孫文が米国から欧州を經由して帰国した時、純三郎は宮崎滔天と共に香港まで迎えに行った、先ほどの写真はその時、デンバー号という船の上で撮ったものだと思います。そして上海まで同行した時に、孫文は純三郎が満鉄に勤めており、撫順炭鉱の炭田で産出された石炭を三井物産に売っていることを聞いた。三井と関係があるということを知り及んだ孫文は三井物産から金を借りたいと言う。当時まだ南北の妥協交渉が進んでおり、孫文としてはできたら袁世凱の政権を阻止したい。孫文は1912年1月に臨時大総

統に就任しますけれども金が足りなくて、軍並びに1912年1月にできる中華民国政府の官僚達の給料が払えない。そこで日本から、ひいては三井から金を借りたいという話が持ち上がります。その時に「漢冶萍公司を日中合弁とする」と。清末の近代化運動の中で清朝は洋務運動をやりますけれども、この中心であった武漢を中心に展開されているのが漢冶萍公司で、鉄鋼業のコンビナートです。これを日中合弁とする条件で、これはある意味で日本側に利権を提供しますけれども、その見返りに500万円貸してくれという話になります。

1912年2月、すでに中華民国ができています。臨時大総統孫文と黄興が借款条約に署名して印を押し、山田純三郎と当時の三井物産上海支店長藤瀬正次郎に渡して、藤瀬は300万円の小切手を孫文に渡します。ところがこれは借款契約の中に、「中国における鉱山、鉄道、電気などの事業を外国に許可するに当たり三井物産に優先権を与える」という条項があった。これは中国の利権を日本に渡すことだということで反対運動が起き、結局漢冶萍公司の株主総会でこの契約が否決されたために、300万円の借款は立ち消えになる。1度は渡されるんですが、北の袁世凱と南の孫文達の妥協が成立したあと、革命軍から横浜正金銀行を通じて返還されたと言われています。

もう1つ満洲租借を条件とする1,000万円の借款というのがありますが、当時満洲はまだソ連ができる前で、北のほうはロシアが、南のほうは日本が利権を持っているわけですが、その他にアメリカもそこに入ろうとしている。この満洲租借論というのは実は清末の段階から時々出てくる。日本に単独で租借させる代わりに金を貸せというのが要点です。これは臨時大総統の孫文と三井物産の森格が話し合いをして、その席に孫文側から孫文の腹心でもある胡漢民、それから大陸浪人で孫文の支援者としても有名な宮崎滔天や山田純三郎も立ち会う。元老であった桂太郎の内意を受けた益田孝が森格の上に乗って、この内命

を受けて森恪は満洲保全をするために日本に満洲を一任するなら日本側は援助を与えようという、満洲租借論を提案します。

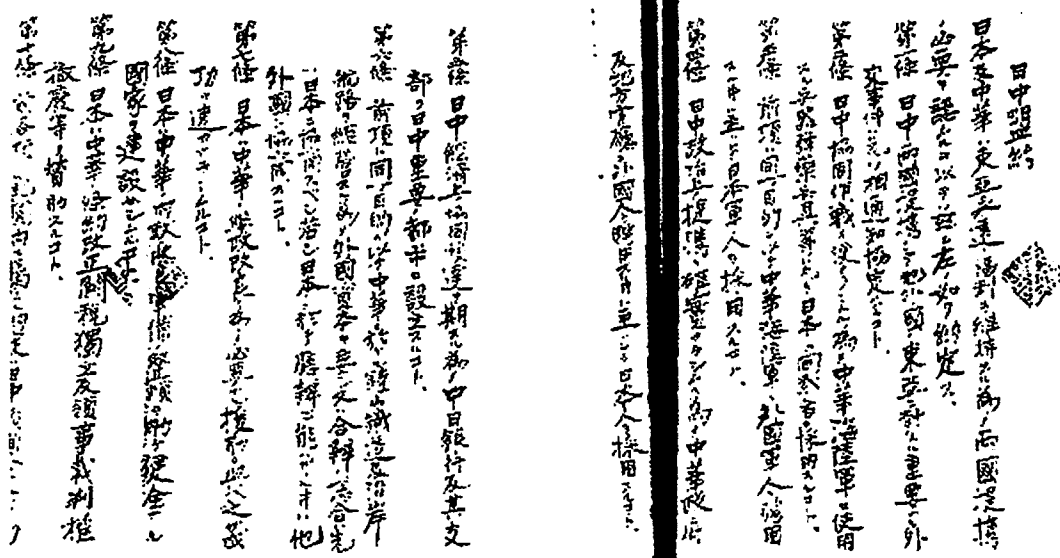
孫文は袁世凱との南北和議が目前に迫っているわけで、臨時大總統職を辞職して袁世凱に臨時大總統職を渡さなくちゃいけない。そういう中で何とかして借款で自分の率いる革命派の基盤強化を図ろうということで、この提案を受諾します。2月8日までに1,000万円の借款を日本から供与する約束を条件に、満洲租借を日本に認めることを応諾します。しかしながら2月8日になっても日本側からの応諾の返事は来ません。結局この話は実現せずに終わります。中国国内でも2月12日に南北和議が成立して2月14日の臨時参議院で孫文の臨時大總統辞任が認められ、このような交渉が実現する状況ではなくなります。ただこの2つの事例は、山田純三郎が孫文支援のために日本側からの借款供与の仲介役を果たしているという事例であります。

その後袁世凱が独裁化していき、議院内閣制を始めようとした同盟会派の宋教仁が暗殺された。議会の許可を得ずして袁世凱が借款を結んだことと、とりわけ宋教仁が殺されたことを契機にして、孫文達が袁世凱打倒の第2革命を行ないますが、これが完全に失敗して孫文は日本に亡命します。

孫文は何とかして袁世凱を打倒したいわけで、袁の部下の張作霖が満洲を支配しているの、黒龍江方面の軍閥が張作霖討伐のため日本にいる孫文に連絡を取りたいということで、山田純三郎と当時まだ若い蒋介石と丁仁傑という人物の3人が満洲に出かけて、反張作霖派の軍閥と手を結ぼうとしましたけれども、これは結局成果をあげられなかった。それから1915年にも同じように、今度は山田純三郎と蒋介石の親分筋の陳其美と戴天仇（日本にも留学し日本語が非常に堪能。のちに大変厳しい日本論を書いた）と共に大連に行き、犬塚信太郎の斡旋によって満鉄病院を本拠にして活動しましたがけれども、これも反張作霖の成果をあげられなかった。ただどちらにしてもこういった、袁世凱打倒のためにまず張作霖をやっつけよう、張作霖打倒の軍閥と手を結ぼうという工作に派遣されています。

日中盟約について

これは孫文の日本亡命の時の話なんですが、日中盟約という密約が、山田純三郎と犬塚信太郎（前の満鉄理事）、それから孫文と陳其美が署名して結ばれています。これが本物かどうか、台湾側はこれは偽物だと言っています。日本側でも本物説と、これは本物とは認められないという説とに分



外感...
 第七條 日本は中華の領土主権を尊重し、其の領土に對しては、
 第九條 日本は中華の領土主権を尊重し、其の領土に對しては、
 第十條 前項各條の目的を達成し、且つ約定日中、駐外使領事局
 者又本國領土に對して、兩國人認諾を経た後、
 第十一條 本國領土に對して、兩國人認諾を経た後、
 大正四年八月五日即
 中華民國四年八月五日東京...

孫文
 陳其美
 犬塚信太郎
 山田純三郎

日中盟約 (本資料は藤井昇三先生の御援助により手に入れた)

かれています。私はこれは本物の可能性が非常に強いと思っています。これについて後に山田純三郎はこういうふうに書いています。「支那側は孫さんと陳さん、日本側は犬塚さんと私の間で、ある密約が結ばれた。今でも某所の金庫の中に〇〇の〇〇は深く蔵されているはずだ。秋山將軍(秋山真之。日露戦争の東郷平八郎のもとにいた)が筆を執り、私が持って行って孫さんに手交した」。ここに書いてある「中国陸海軍の使用する兵器、彈藥、兵具は日本と同式である」さらに「日本軍人の中国政府の採用、政府への日本人の採用」。これは1915年、先ほど藤田先生がおっしゃっていた「對華21ヶ条條約」の第5号の内容と同一です。第5号については袁世凱政權も大変強硬な反対を唱えまして、最終的に日本が取り下げた内容です。台湾が反対する理由は、袁世凱ですら反対したものを、國の父である孫文が認めるはずがないという立場に立っている。それで偽物説を唱えた。中文と日文があるんですが、日文だけ出しておきました。こういうふうの手書きで書いてあります。たとえば第2条「日中協同作戰に便ならしむるため、中華陸海軍に使用する兵器彈藥兵具等は凡て日本に同式のものを採用すること」。武器・彈藥等は日本と同じものという。それから

第3条には「前項に同一の目的をもって中華陸海軍に外國軍人を聘用する件に主として日本軍人を採用すること」というように、先ほどまとめたような内容になっております。

こういうふうにして10条になっておりまして、最後のところに孫文と陳其美と犬塚信太郎と山田純三郎が署名して、それぞれが印鑑を押しております。台湾の先生は盛んに「これは偽書だ」と言っている。たとえば「孫文というこの書き方がおかしい」というようなことを盛んに強調している。でも私は本物である可能性が強いと思っております。ただ中国側にとって不利な条項だけではなくて、第9条「日本は中華の條約改正、関稅獨立、及び領事裁判權撤回撤廢等を贊助すること」。つまり関稅自主權、それから領事裁判權(つまり治外法權)の撤廢等、中国の有利となる条項も含んでおります。7条では「日本は中華の弊政改良のため必要なる援助を与え、これが成功を速やかならしむること」というような日本側の援助のことも書いてある。これは最終的に10年間有効であると。署名が大正4年(1915年)2月5日。これはちょうど21ヶ条條約の交渉が始まった時です。最終的に5月に袁世凱政權はこれを受諾します。ただしここに含まれているような第5号は落

とした形、日本側が引き下げて認めています。しかしながら当時の中国では大変大規模な反日運動が起き、袁世凱政権が最終的に認めた5月7日と5月9日はこれから長く「国恥記念日」と呼ばれます。この時には大規模なデモがあり、最近の反日デモと同じように日本商品ボイコットが高々と掲げられました。にもかかわらずどうして孫文が日中盟約を認めたのか。やはり日本からの援助を求めたためだろうと思います。

第2革命が失敗したあと、15年の12月から第3革命が起きます。孫文が日本で作った中華革命党の機関誌に上海の『民国日報』というのがありますが、その社長に山田純三郎になって、ここで盛んに21ヶ条条約の日本の強要と、袁世凱が皇帝になろうとしたのを批判しましたが、21ヶ条の中で中国側が一番反対した第5号のところとほぼ同じ内容を、密かに1915年の2月に孫文が密約として結んでいるということになるわけで、だから台湾が非常に反発しています。ただ山田純三郎が『民国日報』の社長になったのは、日本人ですから袁世凱政権の弾圧を招かないためだったのだろうと思います。上海のフランス租界にあった山田純三郎の満鉄の社宅は、当時革命党の実質的な本部の役割をしていました。先ほど何度か出てきた日中盟約の署名をした陳其美が、彼の社宅で袁世凱の派遣した暗殺者によってピストルで殺されています。その場にいた女中が耳を撃たれ、純三郎の長女民子を下に落としてしまった。そのため民子は一生不具となったというのは有名な話です。

広東軍政府時代以後

広東軍政府時代。1917年以後孫文が広東に戻り、軍政府を南方の軍閥と一緒に作ります。22年6月孫文に協力し、広東の軍事力を握っていた陳炯明がクーデターを起こし、孫文は広州に流れる珠江に浮かんでいた軍艦永豊に逃げ込んだ。陳炯明もここまでは乗り込めない。何とかして退去

してほしいけれども孫文は頑固で出てこない。真夏だったと言われていますけれども。その時に山田純三郎が当時の広東総領事であった藤田栄助と連絡をとりながら孫文を支援した。

1923年11月、第2次山本権兵衛内閣の時に孫文の支援者の1人である犬養毅が通信大臣として入閣すると、孫文はもともと犬養と面識がありましたので、犬養宛書簡を山田純三郎に託している。これは後に孫文が最後に日本に来て神戸でやった大アジア主義の有名な演説と大変似たトーンで書かれているんです。そこでは「日本は苦しめられている人々の友となるために、第一、中国の革命を援助して成功させ、内には統一を、外には独立を可能ならしめ、列強による束縛を打破すること、第二、(ソヴィエト)ロシア政府を列強に率先して承認すること」という、日本政府の対中・対ソ政策の転換を求めてきます。1919年に中国で有名な五・四運動、学生達がドイツの山東利権を中国に返せと日本に対して反対する運動を起こす。そこで孫文は革命をやるにはやはり労働者、農民達一般民衆に頼らなくちゃいけないということと、それから17年にロシア革命が起きている、そういう中でよく言われることですが、日本に対しても日本政府等の援助を期待して革命をやるという政策を転換してくる。中国の民衆を立ち上げらすという形で革命をやらざるを得ない。そういう思想がはっきり出てくると思います。なお、この文章の最初に山田純三郎から犬養毅の入閣の話聞いたというのが出てきます。

国共合作以後。1924年1月以後ですが、第2次奉直戦争で直隸派が負けて、奉天派の張作霖と、段祺瑞という軍閥と、孫文の3者が手を組むわけです。その時孫文は段祺瑞(1910年代日本が援助していた軍閥)と張作霖(最近は民族主義者という側面が評価されていますけれども、まあ日本が大変援助している)と会見するために北上して12月4日天津に着く。張作霖と孫文というのはずっと敵対していたわけです。張作霖はもともと

馬賊出身で謀略に長けていますから、張作霖が孫文を捕まえるかも知れないというので、山田純三郎は張作霖に付いていた町野武馬という日本人と事前に話を付けて、彼の身の安全を保証することを求めています。孫文は1925年3月12日、北京の鉄獅子胡同の病院で亡くなるんですが、純三郎は従弟の菊池良一、宮崎滔天の兄民蔵、萱野長知らと共に孫文の臨終に立ち会っております。その点からも孫文の信頼が厚かったことが見て取れると思います。これは孫文が生前「建国方略」という自伝に書いているところですが、そこで以下のようなことを言っています。「それ革命のために奔走して終始怠らない者は、山田兄弟（良政と純三郎）、宮崎兄弟（民蔵と滔天）、菊池、萱野（長知）等あり」。

まとめ

最後のまとめですけれども、孫文に信頼を得た理由として、良政は大変短い間ですけれども孫文の指導する中国革命に参加して惠州起義で一命を捧げた。純三郎は革命に参加することによって私利私益を図ることがない。辛亥革命のあとですけれども彼自ら満鉄を辞めようとしている。なぜか。自分が満鉄の社員だと自分の行為の背後に満鉄があって、その意思のもとに動いていると思われる。それは自分の本意ではない。しかし満鉄も懐が深いんですが、「孫文の革命を支援するのは大変重要な仕事だ」と言って、結局純三郎は最後まで満鉄の禄を食んで革命を支援した。孫文を支援した多くの日本人がいますが、三井物産や一部の軍人や政治家は、革命参加の見返りに会社や国家としての利権拡大、とりわけ日本国家としての利権拡大を求めた。純三郎が結果的に日本国家の利権拡大に関連している部分はあるとは思っております。しかしながらそこはやはり孫文の革命支援とのバランスを考えてやった。利権だけを求めなかったということと彼が最後まで信頼を得たのだと思います。特に山田純三郎は日本人としての立

場を利用して、先ほど言いましたように『民国日報』の社長になったり、あるいは日本との借款の仲介役になったりして孫文の革命を支援した。これらも敢えて言えばアジア主義ということになるんだらうと思います。

それともう1つ、これは議論になるところかも知れませんが、山田兄弟が革命運動に入るバックボーンに儒学的、士族的モラルと言うか、幕末の志士達が国事周旋ということで大変一所懸命やりました。あれと共通の精神構造がやはりあるのではないかと思います。今の日本人、特に若者には全くないものですが、これを証拠づけるものとして以下の話を紹介して私のお話を終えますが、山田純三郎が満鉄に勤めて撫順炭鉱の石炭を三井物産に売る時に、三井の商売のやり方を見て商売が嫌になったと言っています。たとえば三井は石炭を売る時に、秤の上に足を置いて重くして売ると言うようなことをやっている。それを見て自分はもう満鉄の社員としてそういうことをやりたくない。三井は非常に商いの道に長けていたわけだけでも、その三井も中国人に石炭を売ると、今度は中国人の工場長なんか「これは粗悪品だ」とか「手抜きがある」とか突き上げられている。それが当時の状況だと言われています。そういうことから見てやっぱり儒学的、士族的モラルと言うか国事周旋と言うか、そういうことに1つの生きがいを考えている。それが各種の日本の政策がアジアをそれほど侵略しない段階にうまくマッチしていたのかなというふうに私は考えたんです。

以上ちょっと長くなりましたけれども私のお話とさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。ただいまから15分間の休憩に入ります。休憩時間を利用して山田兄弟と孫文の関係のスライドショーを行いません。